

【用語】口上書―口頭で述べたことを書き付けたもの 当表―当方、江戸表 仕切―取引の代金諸経費の合計額 得心―承知する 断―前もって理由を告げる 如是―このように、かように

【解説】高崎は煙草の名産地として知られ、近郷一帯で栽培されていた。この地方の煙草は特に「高崎館」や「館」と呼ばれ、一級品とされた。江戸時代、都市の間屋が商品を多量に集荷する方策として、在地の荷主に仕入金の一部を前貸しするというしくみが多くみられた。この口上書は江戸の館煙草問屋から荷主衆へあてた取引き方法の変更書であり、取引きのしくみの一端を知ることができる。この頃、館煙草の取引量は年々増大しており、それまで問屋が無利子で前渡ししていた仕入れ内金が調達できなくなったため、八月から三月晦日までの一定期間、仕入れ内金に利足を課すという一方的な通告であった。

本文書を所蔵する木部家は山名村の煙草荷主で、江戸堀留町の湊屋仁左衛門と取引きがあったことが知られているが、高崎城下の煙草問屋とも取引きをしていた。そして、城下では多数の刻煙草職人が役錢を上納し営業していた。